

**研究報告**

## 日系アメリカ作家を支えたアメリカの文学者たち —ヨネ・ノグチと女性作家—

水野真理子

本稿は日系アメリカ作家と彼（女）らを支えたアメリカの文学者たち（作家、文筆家、詩人、編集者）との間にどのような文学的交流が見られたのかを明らかにするという問題意識のもと、ヨネ・ノグチと女性作家たちに焦点を当てる。ノグチは『日本少女の米国日記』を執筆する過程で、英文の推敲や内容について、高い文学的素養を持ったアメリカの女性作家・文筆家たち、とくにレオニー・ギルモアから、かなりの助力を得た。彼女らとの文学的交流がノグチに与えた影響について、『日本少女の米国日記』を中心に検討する。作品に描かれる朝顔嬢という日本人女性像が、同時代の明治の日本人女性像とどのように異なっているのか、またノグチがアメリカの女性作家たちをどう評価していたのか、そして帰国後のノグチの女性像にどのような影響が与えられたのかについて考察する。

### 1. はじめに

日系アメリカ文学には、英語で書かれた英語文学と日本語で書かれた日本語文学がある<sup>1</sup>。1970年代半ばからアジア系アメリカ人運動の盛り上がりによって、三世作家たちは、自分たちのルーツとして二世作家の作品を再評価し、そして彼（女）ら自身も日系人のエスニシティを反映する作品を創作した。その結果、日系の英語文学は注目を集めることとなった。三世作家たちについては、彼（女）らがアメリカで生まれアメリカで高等教育を受けているために、英語で作品を執筆するのは当然のことであろう。その一方、それよりも時代を遡り、1900年代から1920年代にかけての一世作家たちの中でも、英語でアメリカをはじめとした欧米の読者に向け、作品を発表した作家たちがいた。また二世作家たちは、両親が日本人であり自身は二世として、両親の日本語社会とアメリカの英語社会の間

<sup>1</sup> 日本語文学、英語文学の存在、および主要作家については、植木照代、ゲイル・K・佐藤『日系アメリカ文学—三世代の軌跡を読む』（創元社、1997）にまとめられている。また日系日本語文学の雑誌を中心とした日本語文学の流れについては、篠田左多江、山本岩夫共編著『日系アメリカ文学雑誌研究—日本語雑誌を中心に』（不二出版、1998）が詳しい。日系日本語文学と日系英語文学両方を含めた変遷については、水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880年代から1980年代にかけて』（風間書房、2013）を参照されたい。

で育っていく中で、1930年代頃から英語で作品を書いたが、アメリカ文学として認められるには、1970年代を待たなければならなかった。一世、二世作家らが、主にアメリカの読者に向けて、英語で作品を出版するところまで漕ぎ着けるためには、相当の努力が強いられたのであるが、その背後に彼らを激励し、英文を添削し、助言を与えて支え続けたアメリカの文学関係者や作家、文筆家たちの存在があった。ヨネ・ノグチ（野口米次郎）（1875-1947）が、『日本少女の米国日記』（*The American Diary of a Japanese Girl*）（1902）（以下『米国日記』と略す）を出版し、それがアメリカの文壇においてかなりの話題となったのには、英文の推敲、添削を行ったレオニー・ギルモア（Leonie Gilmore）（1873-1933）の力が大きい。また『武士の娘』（*A Daughter of the Samurai*）（1925）が代表作となった一世世代の作家エツ・スギモト（杉本鉞子）（1873-1950）については、彼女が執筆する際、その傍らに寄り添って、激励し英文を添削したのは、彼女の親友フローレンス・ウィルソン（Florence Wilson）であった。また出版への助力を与えたのは作家、編集者であったクリストファー・モーリー（Christopher Morley）（1890-1957）である。加えて、二世作家のパイオニア的存在の一人、トシオ・モリ（Toshio Mori）（1910-1980）を励まして『カリフォルニア州ヨコハマ町』（*Yokohama, California*）（1949）の出版に力を貸したのは、友人で1930年代から1940年代初めにかけて流行作家であったウィリアム・サロイヤン（William Saroyan）（1908-1981）である。また呼び寄せ一世の詩人加川文一（1904-1981）の才能を見出し、彼の初めての英詩集『秘められた炎』（*Hidden Flame*）（1930）の序文を書いたのは、アメリカのモダニズム詩人アイヴァ・ウィンターズ（Yvor Winters）（1900-1968）であった。またウィンターズは、戦後、優れた短編で認められる二世作家ヒサエ・ヤマモト（Hisaye Yamamoto）（1921-2011）にも、彼女の作品を読んで感銘を受けたことを機に、自身が教鞭を取るスタンフォード大学の奨学金に応募しないかと、面識のない彼女に書簡で連絡し交流を持った<sup>2</sup>。このように、まだ日系アメリカ人という概念が確立していない移民一世たちの初期移住から定住時代、その後、二世が成長し台頭していくも、未だアメリカ文壇において頭角を現すほどの存在になるのが困難な1930年代から戦後1960年代にかけて、日系アメリカの一世、二世作家のうちで、特に英語で作品を発表した作家たちの陰には、アメリカの文学的伝統、知識に裏付けられた文学者、作家、文筆家たちの支えが存在した。

ノグチとスギモトにおける、その助言者たちとの関係性については、彼（女）らの伝記的事項からこれまでもかなり論じられてきている<sup>3</sup>。モリについても、サロイヤンとの関係はいくつかの先行研究でも取り上げられてきた<sup>4</sup>。しかし、加川、ヤマモトについては、概してその焦点が十分に当てられておらず、またノグチ、スギモト、モリらについても、その日系作家とアメリカの作家、文筆家たちの間にみられる文学的な影響関係に関しては、まだ深く検討されていない面もあり、研究の余地が十分

<sup>2</sup> R.L. Barth, ed., *Dear Miss Yamamoto: The Letters of Yvor Winters to Hisaye Yamamoto* (Ardmore: Fifth Season Press, 1999) .

<sup>3</sup> ギルモア自身の来歴、教育、そしてノグチとギルモアの関係については、Edward Marx, *Leonie Gilmore: When East Weds West* (Santa Barbara and Matsuyama: Botchan Books, 2013)、ノグチと英米の詩人たちとの交流、影響関係については、堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012）を参照されたい。

<sup>4</sup> 水野、『日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷』、第5章を参照。

にある。彼（女）らの関係は、一方通行の単なる教授され、それを受容するだけの関係では決してなかっただろう。また彼（女）たちとの交流を通して、日系作家たちの作風やその後の思想、価値観に、何らかの影響が与えられたことも否めない。例えば、ノグチが作品を発表した 1890 年から 1900 年代という移民初期においては、日本では明治 30 年代から 40 年代頃、まだ日本とアメリカとの文化的交流、その両者の文化に対する認識や理解は始まったばかりであった。そのような時代において、日本の作家志望の若者と、アメリカの文化的伝統の中で育ってきた、文学に関心のある者たちが交流すれば、お互いを知り意見を交わしていく中で、互いの国における物事の価値観の相違、文化、思想の違いについて、時に驚きや戸惑いをもって認識していったと考えられる。さらには、ノグチやスギモト自身、そして彼（女）らの作品を通して、日本という国や日本の文化を見たかもしれない。このように考えると、日系作家たちとアメリカの作家や文筆家たちの交流を探ることによって、そこにどのような東西の文化、思想の影響関係が見られるのかを考察することができよう。

このような問題意識にもとづいて、本稿では、英語で作品を発表し話題となった一世世代の代表的作家の一人であるノグチと、彼の執筆活動を支えたギルモア、その他の女性作家、文筆家との交流に着目する。『米国日記』執筆の過程で、ノグチははじめてギルモアと出会っている。そしてその間、または前後、ギルモアをはじめ何人かの女性作家、文筆家たちと交流を持っており、彼（女）らの書簡のやり取りからそれを窺い知ることができる。若かりし日のノグチは恋多き男性であったため、ノグチとギルモアについては、その恋愛関係に焦点が当てられがちであった。ノグチの英文添削の仕事を引き受けたギルモアは、ほどなくしてノグチと恋愛関係で結ばれ、その法的根拠に疑問はつくようだが、結婚の誓約書を交わした。しかしその後、1904 年に日露戦争が勃発し、ノグチはギルモアが懐妊したことを知ったにも関わらず、彼女を残して帰国する。アメリカに残ったギルモアは母の住むカリフォルニアで長男（イサム）を出産し、1907 年には 3 歳の幼い息子を連れて来日、数年ノグチと同居した。しかしながら、その間ノグチが別の日本人女性（のちの妻武田まつ子）との間に長女をもうけたことを知り、1910 年には正式に別居した。このある意味複雑で、世間の噂の的になるような関係が注目されがちであったが、ノグチがギルモアを中心とする女性作家たちとの交流を通して、日本人の女性像について再考する機会を得たとも考えられないだろうか。本稿では、この点について最も顕著に表れている『米国日記』の執筆時期に焦点を当てて、考察してみたい。

## 2. ヨネ・ノグチの『米国日記』と日本人女性像

### 2-1. ノグチの略歴、『米国日記』執筆の意図

1875（明治 8）年、ノグチは愛知県海東郡津島町（現津島市）で、下駄や雨傘を商う父伝兵衛の四男として生まれた<sup>5</sup>。愛知県立中学校を卒業後、1891（明治 24）年慶応義塾に入学する。少年期から英語や英文学に関心が高く、彼は自伝『ヨネ・ノグチ物語』（*The Story of Yone Noguchi: Told by Himself*）

<sup>5</sup> ノグチの伝記的事項、作品については、主に堀、『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、Edward Marx, *Yone Noguchi: The Stream of Fate*, vol.1 (Santa Barbara and Matsuyama: Botchan Books, 2019) を参照した。

(1915)の中で、10歳の時に、マーキス・ウィルソン (Marcius Willson) の英語教科書を手に取ったときの感動を述べている<sup>6</sup>。1893 (明治 26) 年に慶応義塾を中退し、志賀重昂の家に寄宿したことを契機に、渡米を決心する。ノグチは1893年12月、サンフランシスコに到着し、スタンフォード大学のあるパロ・アルトで、皿洗いや邦字新聞『桑港新聞』の配達などをし、貧しい日本人移民や書生と同様の暮らしをしていた。その後、アメリカ詩人ウォーキン・ミラー (Joaquin Miller) (1837-1913) に感銘を受け、彼のもとに寄寓し、自然の中で思索しながら英語で詩を創作した。その間、詩雑誌『ラーク』 (*Lark*) にも作品を寄稿して、その編集者ジレット・バージェス (Gelett Burgess) (1866-1951) など、地方色を出す新たな詩を模索していたカリフォルニアのボヘミアン詩人たちとも交流を持った。また、ウォルト・ホイットマンやヘンリー・デイヴィッド・ソロー、エドガー・アラン・ポーなど著名な詩人の作品からも学びながら、詩作を行っていった。第一詩集『明界と幽界』 (*Seen and Unseen, or Monologues of a Homeless Snail*) (1896)、第二詩集『溪谷の声』 (*The Voice of the Valley*) (1897) を出版し、ノグチの詩における、異国の人間であるゆえの孤独感などの詩表現が称讃され、彼はアメリカ文壇において新たな詩人として注目された。さらにノグチの文名を広めることになったのは、1902年の『米国日記』であった。この作品はアメリカに憧れを抱き、イエール大学出身の叔父とともに渡米した上流階級出身の少女、「朝顔嬢モーニング・グローリー (Morning Glory)」が、異国の地で初めて経験する異文化体験を、日記体の形で記したものである<sup>7</sup>。その後1902年の秋にイギリスに渡ったノグチは、続編『米国少女の小間使い日記』 (*The American Letters of a Japanese Parlor-Maid*) (1905) を執筆し、日本で出版した。

『米国日記』はこれまで、日本の描写について誤りが多いジャポニズム小説を批判した作品として、またノグチ自身のアメリカ体験や詩人としての経験や決意を反映した作品、またノグチが渡英の資金繰りのために、当時のジャポニズム小説の人気に乗じて成功を狙った作品、さらには日本の渡米奨励論を踏まえて現実のアメリカ生活の厳しさを示唆する狙いもあった作品と論じられてきた<sup>8</sup>。それらの

<sup>6</sup> Yone Noguchi, *The Story of Yone Noguchi: Told by Himself* (London: Chatto and Windus, 1914; Tokyo: Edition Synapse, 2007), 1; ヨネ・ノグチ、伊藤精二訳『ヨネ・ノグチ物語—野口米次郎自伝』(文化書房博文社、2015)、15。

<sup>7</sup> この小説はニューヨークの月刊誌『レスリー』 (*Leslie's Monthly Magazine*) に1901年11月から3回連載され、その後1902年9月にフレデリック・A・ストークス社から、野口の名は伏せ朝顔嬢 (Miss Morning Glory) の筆名で出版された。堀、『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、66。

<sup>8</sup> 主な先行研究は以下である。堀まどか「野口米次郎『日本少女の米国日記』の日米における評価」『会誌』22巻、2003年、20-27; 宇沢美子「朝顔の描き方—ヨネ・ノグチとエトウ・ゲンジロウのジャポニズム遊戯」『AALA Journal』10号、2004年、17-33; 堀まどか「野口米次郎『日本少女の米国日記』—奨励される女子の渡米と移民社会の現実」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』29巻、2004年12月、221-246; 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(彩流社、2005)、233-250; 堀、『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、66-77; 和田桂子「野口米次郎のロンドン (20) —『日本少女の米国日記』」『大阪学院大学外国語論集』54・55号、2007年3月、123-143; 亀井俊介『ヨネ・野口の英文著作 (ヨネ・ノグチ英文著作集—詩集・小説・評論 別冊日本語解説)』(エディションシナプス、2007); Edward Marx, afterword to *The American Diary of a Japanese Girl*. ed. Edward Marx and Laura E. Franey (Philadelphia: Temple University Press, 2007); Laura E. Franey, introduction to *The American Diary of a Japanese Girl*; 山口ヨシ子「『マダム』・バタフライをこえる試み—ヨネ・ノグチの『ミス』・モーニング・グローリー」『人文研究：神奈川大学人文学誌』162巻、2007年9月、87-123; 星野文子『ヨネ・ノグチ—夢を追いかけた国際詩人』(彩流社、2012)、87-100; 星野文子「詩人ヨネ・ノグチの『弁明』としての *The American Diary of a Japanese Girl*」『和洋女子大学紀要』第58集、2018年3月、25-36。

指摘を踏まえつつ、筆者はさらにノグチにとってこの作品は、文筆家としてその能力を発揮できるアメリカの女性たちに出会い、アメリカにおけるジェンダー意識の違いや女性の生き方、価値観の相違を再認識する大きなきっかけとなったのではないかと考える。この作品を生み出していく過程、その前後で、ノグチがギルモアら自立した女性作家たちと意見を交換し合ったことによって、彼女たちからアメリカにおける進歩的な女性像を学び、作品に生かしたのではないかと、そして日米の女性の相違について再認識したのではないかと思われるのである。まずそれらの問題を、朝顔嬢の女性像に焦点を当てて考察してみよう。

ノグチはこの作品を、同時代に出版されていた日本関連の小説、いわゆるジャポニズム小説に描かれる日本イメージに不満を覚え、真の日本を描きたいという思いから書いたと考えられる。19世紀末から20世紀初期にかけては、欧米でジャポニズム（日本趣味）が席卷し、美術、演劇、文学の分野で、西洋の視点から見る東洋の国日本が描かれたが、その描写は決して現実の日本の姿を正確に描出しているものではなかった。先行研究でも指摘されてきたが、ノグチはその描写にかなりの不満を持っていたようであり、例えば1885年初演、ウィリアム・ギルバート脚本、アーサー・サリヴァン作曲のコミック・オペラ『ミカド』(*The Mikado*)についてや、オノト・ワタンナの『日本の鶯』(*Japanese Nightingale*) (1901)、そしてそれをもとにした演劇について、その中に表れる日本文化や風物の描写の間違いに言及し、憤りを交えて批判している<sup>9</sup>。

ノグチには、ジャポニズム小説家らが描く、いわゆる「ムスメ小説」に対抗して、真に日本を表した作品を描きたいという思いがあったようだ。ムスメ小説というのはピエール・ロティ (Pierre Loti) (1850-1923) の『お菊さん』 (*Madame Chrysanthème*) (1887) や、ジョン・ルーサー・ロング (John Luther Long) (1861-1927) の短編小説「マダム・バタフライ」 (“*Madam Butterfly*”) (1898) に描かれるような、若くか弱い日本人娘が来日した白人男性と恋に落ち結婚を誓うが、最終的には遺棄されるという型のストーリーを指す<sup>10</sup>。また日本人女性と白人男性、もしくは日本人男性と白人女性との国際結婚が成就するというロマンスを主軸にした、ワタンナの『日本のヌメさん』 (*Miss Nume of Japan*) (1899) や『日本の鶯』も、「ムスメ小説」の類型として挙げられよう。山口ヨシ子が「『マダム』・バタフライをこえる試み—ヨネ・ノグチの『ミス』・モーニング・グローリー—」 (2007)<sup>11</sup>で詳細に示したように、ジャポニズム小説を逆手に取るユーモアや明らかな批判などが『米国日記』の随所に見られ、実際にノグチがジャポニズム小説を意識し、それに対しての反論という意味も込めてこの作品を生み出したことに疑いの余地はない。しかし、真の日本像を描きたいという思いと、出来上がった日本人女性朝顔嬢はかなりかけ離れているように思われる。ノグチが書いた朝顔嬢は、同時代の女性のあり方について、いくつかの点で現実を反映してはいるようだが、それが当時の等身大の日本の女性像を忠実に描いたのかと問われれば、疑問の余地が残る。

<sup>9</sup> Yone Noguchi, “Onoto Watanna and Her Japanese Work,” 『太陽』13巻8号、1907年、18-21。

<sup>10</sup> ムスメ小説やムスメのイメージについては、岩田和男「むかし、ムスメ小説があった—『蝶々夫人』と日本女性のイメージ」佐々木英昭編『異文化への視線—新しい比較文学のために』(名古屋大学出版会、1996)、41-58が詳しい。

<sup>11</sup> 山口、「『マダム』・バタフライをこえる試み」、115-119。

## 2-2. 明治の日本人女性像

試みに、明治期日本で理解されていたと考えられる日本人女性像について確認してみよう。明治の女性像といっても階級や環境において異なるため、一つの類型を提示することは難しいが、当時、国家を挙げて期待された模範的女性像が、元田永孚編纂『幼学綱要』（1882）と西村茂樹編『婦女鑑』（1887）に明確に表れている。1882（明治15）年、明治天皇の命を受け勅撰の修身書として『幼学綱要』が刊行され、その補遺として『婦女鑑』は編纂された。『幼学綱要』には、225の取るべき模範的行動の事例が、儒教的要素の濃い20種の徳目に分けて記されており、特に女性に関する項目としては「貞操」に関する事例が多く記載されている。また『婦女鑑』には、全120件124人の日本、中国、欧米を含む事例が掲げられており、「家」に関わる徳目（孝行、婦道、母道）や西欧的徳目（友愛、慈善、愛国）などが紹介されている<sup>12</sup>。例えば黒柳孝女という女性は、父が紀州藩士で小さい頃より伶俐で、婦女の心得を固く守る女性であった。大人になれば舅と姑へ良く仕え、儉約家で家法を守った。教育にも力を注ぎ、女子には「柔順にして父母姑舅夫につかへ、子を教へ、儉をつとむるをおのが職分とせよ」と教えたという<sup>13</sup>。ここで理想とされている女性は献身的に両親、義父母、夫など自分以外の家族の構成員全てに進んで尽くす、良妻賢母的女性である。

さらに、同時代の日本の小説に描かれた女性像を取り上げてみたい。例えば次のような女性像が数少ない先駆的な女性作家によって描かれた。まず、最初の近代女性作家と考えられるのが三宅花圃（1868-1943）で、彼女の『蕨の鶯』（1888）は近代初の女性の手による小説だと言われている<sup>14</sup>。三宅は旧姓田辺竜子で、元老院議員の父を持ち、東京高等女学校を卒業、1892（明治25）年に三宅雪嶺と結婚し三宅姓を名乗った。彼女は、朝顔嬢を髣髴とさせるような行動力と先進的な価値観を持つ女性であり、家庭の経済を助けるために小説を書いて金銭を得ようとし、この『蕨の鶯』を一気に書き上げた。この作品内にも、鹿鳴館で行われる舞踏会に参加する上流階級の女学生たちや、弟の立身出世を援助する女性、画家や教員志望の女性など、自我に目覚めて各自の生き方を追求する女性たちが描かれている。その一方で作品の随所に、慎ましい生活態度や内助の功に徹する女性を支持する見解が表れているという指摘もあり、伝統的な期待される女性像のイメージの範囲内での、自らの生き方を追求する女性たちとして描かれているともいう<sup>15</sup>。また木村曙（1872-1890）も、明治女性作家の先駆けとなる作家の一人である<sup>16</sup>。彼女は『婦女の鑑』を『読売新聞』に、1889（明治22）年1月から2月まで33回連載した。この物語では、上流階級の令嬢が父と口論の末に渡英し、ケンブリッジ大学の女子部を卒業、その後アメリカに渡り、ニューヨークで女工として働く。そして帰国後は貧民を救済するため工場を建設する。この女性も向学心に溢れ、渡英する勇気と行動力を備えた女性である。この姿は、明治初期、欧米諸国に憧れを抱き、学問を志す文明開化期の女性を反映していよう。しか

<sup>12</sup> 菅野則子「望まれる女性像—『幼学綱要』・『婦女鑑』を中心に」『帝京史学』26号、2011年2月、141-169。

<sup>13</sup> 同上、152。

<sup>14</sup> 岩淵宏子、北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史（近現代編）』（ミネルヴァ書房、2005）、11-13。

<sup>15</sup> 片岡懋「三宅花圃についての一考察—明治20年代の作品を通して」『駒沢短大国文』2、1971年12月、70-83。

<sup>16</sup> 岩淵、北田、『日本女性文学史』、13-15。

しその一方、結局のところは教育の機会を利用し、家や国家のために献身する女性というイメージからははずれていない。

さらに、明治の女性作家として著名なのは樋口一葉（1872-1896）であろう。彼女の作品にはより庶民レベルの女性像が描かれている。彼女は「十三夜」（1895）において、冷淡な夫に苦悩する女性お関の姿を描く。離縁を決意しその許しを両親から得るために、後ろ髪ひかれる思いで愛する息子太郎を置いて、夜半、実家を訪れる。しかし両親と話すうち、やはり息子のために耐え忍んでいくことを覚悟し、家に戻ると決意する。帰り道、乗った人力車の車夫が、実はかつて恋心も持っていた幼馴染の男性であることが分かる。落ちぶれてしまった男性に再会し、互いの心の内を吐露したい思いが溢れたが、何も言わずに別れるのである。このお関は、幸福を見出せないすきんだ結婚生活や家制度において耐え忍び、自分の本心押し殺し、良い妻、良い母として生き抜く女性として描かれている。また恋愛には奥手で控え目、慎重な女性である。夫を尊敬しなければいけないという義務感を持ち、家制度と両親の意思の尊重を最後には決意する。その中で、力強く生き抜こうとする姿が描かれている。

明治期の主に女性作家によって描写された女性像は、それが創作物であるゆえに様々ではあろう。上で述べた女性像は一例ではあるが、しかし先に見た『幼学綱要』や西村茂樹の『婦女鑑』に見られるように、明治の日本社会で求められた良妻賢母像に、女性たちは従うことを期待され、その模範像にかなう人物であろうと努める中で、もがき苦悩する姿が現実に描かれたことは確かである。それが明治の女性像の主流の型であろうことが、やはり推察されるのである。

### 2-3. 朝顔嬢の描かれ方

次にこうした明治期の女性と、ノグチの『米国日記』に描かれた朝顔嬢を比較してみよう。朝顔嬢は強く多様な特質を持った女性である。その特徴を述べるとすると、快活、大胆、勇気、文学的知識が豊富、ユーモア、自立独立心、自由の国アメリカへの憧れ、詩人を目指す、進んだ結婚観、女性観、日米両文化に対する風刺、批評眼を持っていると、このような言葉を並べて説明することができる。例えば大胆さや勇気について言えば、朝顔嬢は600年をも遡る先祖の系譜で、初めてアメリカの地を踏んだと説明されている。この点に関しては、明治初期から西洋文化に関心を持ち、海外雄飛、留学に漕ぎ出した女性たちを反映していると捉えられよう。

また朝顔嬢がアメリカに憧れを抱く理由は、アメリカが女性の国であると認識しているからである。彼女は『米国日記』の「渡航前」（“Before I Sailed”）の10月27日の箇所で、アメリカの雑誌から女性のドレス姿の絵や写真を切り抜き、どのように洋装を着こなすべきか思案している。「それらの写真は、メリケンが女性の国だっていうことを示しているの、だから、ほとんどが女性の写真ばかりだと思ふのね、私はこれを見てロングスカートの着こなしを学んだのよ。」（“The pictures—Meriken is a country of woman; that’s why, I fancy, the pictures are chiefly of woman—showed me how to pick up the long

skirt.”)<sup>17</sup>と述べて、アメリカへの憧れを募らせている。アメリカが自由平等の国であること、そして女性の権利も、日本に比べて相当に確保されている国であることは、当時の日本人の間にかなり浸透していた認識であったと考えられる。例えば、津田梅子がアメリカに二度留学し、名門の女子大学、プリンマー大学で学問を追及し続けたことは、アメリカという国が、女子学生にも高等教育を平等に与える国であることを印象づけたであろう。また一世作家エツ・スギモトは『武士の娘』において、東京での女学校時代に、アメリカ人の教師たちが教授する自由という感覚を、彼らの自由奔放な庭園造りの方法に見出し、規律の中で手足を縮ませていた自身の心が解放された衝撃を語っている<sup>18</sup>。加えて、1903年に渡米した永井荷風も、帰国後に「男学生を監督する米国の女学生気質」（1909）の随筆を発表し、男女平等に学ぶ姿、さらには女子学生が男子学生の品行を監督するほどであることを報告している<sup>19</sup>。したがって上述のような朝顔嬢のアメリカ認識は、性差に関わらず、明治の日本の若者たちに抱かれていたものとして当を得ていよう。

では、次に吐露する彼女の価値観についてはどうだろうか。朝顔嬢は渡航前、10月30日の日記で次のように述べている。

30日 一年に何度も、私は結婚の申し込みよりももっと満足のいく何かを願ってきたの。女性第一の国に私を連れていくことになる寛大な運命は、その「何か」でないかと思うの。私はアメリカに女性として渡れることが嬉しい。私は、アメリカに「同化」したほうが良いのかしら。（30<sup>th</sup>—Many a year I have prayed for something more decent than a marriage offer./ I wonder if the generous destiny that will convey me to the illustrious country of “woman first” isn’t the “something.”/ I am pleased to sail for Amerikey [*sic*], being a woman./ Shall I have to become “naturalized” in America?)<sup>20</sup>

まず彼女は、結婚よりも価値のある何かを求めてきたと言い、結婚し良い妻になるという価値観に異論を呈している。また、その結婚以外の価値あるものを追求できるのが、女性の国アメリカではないかと考えている。

さらに日本人男性や女性について、次のように捉えている。

ジャップの「紳士」って、古い野蛮さを望んでいるの、彼らはまだ女性たちは売買される陶器だと考えているのよ。いつになったら愛とは何かを理解するのかしら！馬鹿げてる。私は知らない男性に結婚を申し込まれるときほど、侮辱を感じたことはないわ。私は宣言します、東洋の男は文明化の資格がないのよ。男性を教育しなさい、女性ではなくて！明治の啓蒙時代に生まれた女

<sup>17</sup> Yone Noguchi, *The American Diary of a Japanese Girl*, eds. Edward Marx and Laura E. Franey (New York: Frederick A. Stokes, 1902; Philadelphia: Temple University Press, 2007), 6. Citations refer to the Temple University Press edition.

<sup>18</sup> Etsu Sugimoto, *A Daughter of the Samurai* (New York: Doubleday, Page and Company, 1925), 136; 杉本鉞子著、大岩美代訳『武士の娘』（筑摩書房、1994）、161-162。

<sup>19</sup> 永井荷風「男学生を監督する米国の女学生気質」『婦人世界』、1909年8月1日。ここでは『荷風全集』第30巻（岩波書店、1995）、3-7を使用した。

<sup>20</sup> Noguchi, *The American Diary*, 7.

性は驚くべき魂を持っているのよ。私は私の選ぶ通りにふるまう。私は笑いたって思ったときに、母に許しをもらうまで待つなんてしないわ。(The Jap “gentleman”—who desires the old barbarity—persists still in fancying that girls are trading wares./ When he shall come to understand what is Love!/ Fie on him!/ I never felt more insulted than when I was asked in marriage by one unknown to me./ No Oriental man is qualified for civilization, I declare./ Educate man, but—beg your pardon—not the woman!/ Modern gyurls [sic] born in the enlightened period of Meiji are endowed with quite a remarkable soul./ I act as I choose. I haven’t to wait for my mama’s approval to laugh when I inclined to.)<sup>21</sup>

ここで朝顔嬢は、日本人の男性は愛とは何かを理解しておらず、非文明的で女性を商品のように捉えていると鋭く批判する。「売買される陶器」という語には、当時のジャポニズムの動きの中で取引される日本の芸術品のイメージが込められているのだろう。また親に決められた見合い結婚に反発し、自分の意思で行動すると宣言している。これらの点は、明治の女性像、特に樋口一葉の小説に見られた夫や家族に仕える女性、家制度というしがらみの中で苦悩する女性像とは決して合致せず、明治の女性が抱く価値観としてはかなり革新的である。

さらに、朝顔嬢の快活さ、自由奔放さ、大胆さというのは随所に見られる。例えば、サンフランシスコ到着後を書いた「アメリカキーで」(“In Amerikey”)の章、10月27日の日記で、朝顔嬢はアメリカ人の巻き髪に魅力を感じ、むしろ髪の毛全体が赤色になっても構わないとまで言っている。日本では不運(bad luck)を象徴すると考えられている巻き髪だが、自分はその価値観をアメリカでは変えたいと考えている<sup>22</sup>。また、恋愛関係についても大胆さを持っている。オスカーというボーイフレンドができて、ディナーの後に庭園でオスカーと語らう。オスカーは二頭のロバを連れてきており、その一頭にオスカーが朝顔嬢をさっと抱えて乗せようとした。そのとき、アメリカ人男性とはじめて接触したその感覚について彼女は、「ものすごい興奮が体中を駆けめぐったわ!」(“What a sensation ran through me!”)<sup>23</sup>と記す。さらに彼女のスカートがはだけて、脚が露わになってしまったが、そのとき恥じらうというよりも、綺麗なストッキングを履いていて良かったと彼女は思うのである。

加えて、ノグチ自身の経験も朝顔嬢に反映されているからではあるが、朝顔嬢は文学に興味を持ち、詩人を目指す女性として描かれている。12月26日、朝顔嬢は知人のシュイラー夫人(Mrs. Schuyler)に彼女の書斎から本を選んでほしいと頼む。その書斎には、ソクラテスに始まる文学のすべてが詰め込まれていた。集めることが趣味で読まれていないという面もあるが、彼女はシュイラー夫人から、ペルシアの詩人ウマル・ハイヤム(Omar Khayyam)の『ルバイヤート』を手渡される。彼女は雨音を聞きながら、『ルバイヤート』を熟読するのである。ハイヤムについては、朝顔嬢の叔父が「アメリカ女性はウマルとチキンサラダは避けて通れないんだよ。」(“American woman can’t keep away from Omar and chicken-salad.”)<sup>24</sup>と言い、アメリカ女性のハイヤムと彼の著作への興味を述べている。

<sup>21</sup> Ibid.

<sup>22</sup> Ibid., 26.

<sup>23</sup> Ibid., 62.

<sup>24</sup> Ibid., 65.

これらの朝顔嬢の行動や価値観から分かるように、彼女は明治の日本女性の姿とはかなりかけ離れており、むしろアメリカ人女性の文化的特質に積極的に馴染んでいきたいと考えている女性である。

「同化したほうが良いのかしら」と渡米前に思ったように、彼女は日本社会よりもアメリカ社会において生きるほうがふさわしいような女性としても描かれているのである。この朝顔嬢を生み出すのに当然影響を与えたのは、ノグチと交流を持ったアメリカ女性作家たちであろうことは、容易に推測される。

### 3. 朝顔嬢創作とアメリカの女性作家たち

#### 3-1. 女性作家たちとの書簡にみるノグチの認識

朝顔嬢は、明治の日本女性の渡米への憧れも反映し、またノグチ自身のアメリカ体験も取り込み、さらにアメリカ女性の文化にも馴染むような、様々な要素が入った女性像である。したがって、朝顔嬢のモデルそれ自身がアメリカ女性だとは言えないのだが、しかしノグチがアメリカの女性作家たちと交流したことによって、作り上げられた部分もあるだろう。そこでまず『米国日記』執筆の頃のノグチの書簡をてがかりに、ノグチがアメリカで出会った女性作家たちを、どのように捉えていたのか確認してみよう。

英米時代のノグチは多くの女性作家、文筆家たちと交流を持った。その関係は恋愛に発展することが多々あり、ノグチの評伝を書いた堀まどかは「人なつっこくかつ寂しげで独特の雰囲気を持った東洋の若者、しかも日本文化や文学について語れる稀少な英語詩人は、周囲の人々から愛されやすかったのだろう。」<sup>25</sup>と評している。ノグチは1898年頃、まだギルモアと出会う前に、ブランシュ・パーティングトン (Blanch Partington) (1866-1951) と恋愛関係にあり、彼女に『米国日記』の推敲を依頼していた。その後、『ワシントン・ポスト』の記者エセル・アームズ (Ethel Marie Arms) (1876-1945) とともに1902年の秋頃から恋人の関係にあり、英国滞在から戻ったノグチはアームズと婚約してともに日本に帰国する計画も立てていたという<sup>26</sup>。さらには1903年5月頃からはまだ無名の作家ゾナ・ゲール (Zona Gale) (1874-1983) とともに友人以上の親密な関係にあった。ゲールとは、ノグチ帰国後も交流が続き、彼女の処女作『幻島ロマンス』 (*Romance Island*) (1906) を1929年に翻訳出版するなど、文学を通じた絆を育んでいた<sup>27</sup>。

ここでは『米国日記』執筆時期に焦点を当てるため、特にその時期の書簡である渥美育子編『ヨネ・ノグチ英文書簡』 (*Yone Noguchi Collected English Letters*) (1975)<sup>28</sup>をてがかりとしよう。まずこの書簡資料には、1898年から1890年までのパーティングトンとの書簡が収められている。渥美によれば、ノグチは1898年10月に彼女と出会い、その時彼女は特に演劇取材する『サンフランシスコ・コール』 (*San Francisco Call*) のリポーターであった。1898年10月11日に、イースト・オークランドの住所から、ノグチはパーティングトンに初めての手紙を書いている。そこで彼女のことを、自分の内

<sup>25</sup> 堀、『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、90。

<sup>26</sup> 同上、91。

<sup>27</sup> 同上、90-91。

<sup>28</sup> Ikuko Atsumi ed. *Yone Noguchi Collected English Letters* (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975) .

面を吐露できる数少ない友人のうちの一人だとしたためている。そして、彼女の文才について次のように褒めながら、自分の詩を推敲してもらえないかと頼んでいる。

僕は、君がとても賢くて良い判断に満ち溢れていると思います。僕は文法や綴りがうまくない作家なんだ。だから僕は本当にアドバイスしてくれる人を望んでいて同時に共感できる人も望んでいます。前に君に渡した本の中に、僕の詩が2篇あると思うのですが。もしできればあなたの女性らしい判断と知恵で直してもらえないだろうかと思っています。(I think that you are so bright and full of good judgements. I am such a writer without good grammer [sic] and spelling. How I wish to know and have a fine adviser and “sympatica [sic]”! I can find my two poems in the book that I left to you other day. I wish you will read and correct them with your womanly judgement and wisdom.)<sup>29</sup>

この書簡から、ノグチが率直に自分の英語力の弱さを述べて、パーティングトンの文才や文学の知識に頼りたい旨を伝えているのがわかる。また女性らしい感覚をノグチが尊重していることも窺える。ノグチはたびたび、パーティングトンに詩の推敲を依頼しつつ、その後『米国日記』のもととなったと考えられる「お蝶さん」(O'cho-san)の日記という作品の推敲を頼んでいる。そして1899年の8月25日には、この「お蝶さん」をサンフランシスコの新聞に掲載できないだろうかとの相談を持ち掛けている<sup>30</sup>。

さらにその後ノグチとパーティングトンとの間で、「お蝶さん」の掲載紙について、また作品の内容についての意見の相違があった。また修正に時間がかかっていることへの苛立ちをノグチは彼女に抱いて、1899年9月5日の書簡で、「君は僕たちとの感情の違いをよく見るべきだ。君の仕事はただ余暇時間を費やすぐらいのもの、僕の仕事は毎日全ての時間を費やす仕事なんだ。」(“You must see the difference of our feeling with it—your working on it being simply a pleasure, my working being a whole work of everyday.”)<sup>31</sup>と述べている。その書簡にパーティングトンが何らかの反論をし、それに対してノグチは9月21日、次のように記している。

僕は君の要求や考えに反対しようというわけではないんだ。ただ、君の優れた判断とすばらしい常識に訴えようとしているだけだよ。新聞にその日記を掲載するのが良くないだろうか。例えば『エグザミナー』に売れるよ！(I don't mean to against your desire and idea. Just I appeal to your good judgement and fine common sense. Is it not better to publish the diary in newspaper? Suppose we will sell it to the Examiner!)<sup>32</sup>

作品を直してほしい、その助力を得たいことで必死であるという陰に隠れて見落としがちであるが、

<sup>29</sup> Ibid.,26.

<sup>30</sup> Ibid.,40.

<sup>31</sup> Ibid.

<sup>32</sup> Ibid.,41.

ノグチはまずパーティントンが有する優れた知識、文学的素養を尊敬し、対等の存在として原稿の修正を依頼しているのがここからも感じられる。またノグチは作品の原稿料を気にしていたため、新聞などの広範囲な読者に読んでもらえるほうが、得られる収入が高いと考えていたようだ。このような理由で、掲載紙については両者に意見の相違があった。

次にギルモアとの書簡においてはどうか。1901年2月4日がノグチから彼女への最初の書簡のようである<sup>33</sup>。ノグチは『ヘラルド』(*Herald*)紙に、英文推敲のアルバイトを求めているという広告を出し、それに応募してきたのがギルモアであった。パーティントンに抱いた推敲作業の滞りに対する苛立ちとは異なり、ギルモアはノグチが望むように、迅速にかつ丁寧に推敲作業をしてくれたようである。その満足感を1901年4月と考えられる書簡で、ノグチは次のように述べている。

次の三章を送ります。ねえ、これらを君の考えにしたがって直してくれないかな。この恐ろしく長いパラグラフを短くしても良いかもしれない。(中略)とにかく君の考えにしたがって整えてくれないだろうか。(Here are next three chapters. Say, listen, can't you fix them according to your own idea? I think that you would better make those horribly long paragraph more [sic] shorter .... Anyhow I wish you will arrange them to your idea.)<sup>34</sup>

ノグチがギルモアに対して、絶大な信頼を置いているのがわかる。彼はこの書簡だけでなく、他の日付の書簡においても、たびたびギルモアの信じるように、大胆に推敲してほしいと強く依頼している。ギルモアにはノグチが尊敬できるほどの文学的素養があること、またそれを優れた英文で表現してくれるとノグチは認識し、彼女に感謝し、そしてかなり依存していたようである。

ノグチのギルモアへの信頼は絶大であったようだが、しかし、両者は結婚についての価値観の差異を発端に、激しい議論に発展したこともあった。ギルモアが創作した物語の結末について、批判的な意見をノグチが述べ、それに対してギルモアがかなり傷つき、感情を悪くしたようであった。それを受けて、その後1901年7月、ノグチはギルモアに謝罪した。

本当に、本当に、本当にごめんなさい。そんな辛さを僕は与えたのだろうか。いいえ、と言ってほしい。そんなつもりはなかったんだ。でも仕方がない、あの晩に言ったことはもう取り返しがつかないのだから。君は、この茶色いジャップが紳士たる資格を備えていないと思うだろうね。この国では「紳士」というのは称讃の仕方を分かっている人だよ、それが真実かどうかは別にして。アメリカの紳士たちはとても魅力的で、淑女に対してふさわしい形容詞をたくさん知っている。でも僕はそんな伊達男じゃない。僕は単なるジャップなんだ、君が知っている通り、無知で「狭量」な。(Awfully, awfully, awfully sorry! did I give you such a pain? Please say no! I didn't mean xxx [sic] well, never mind, I can't take back what I said other night. Now you will see that a

<sup>33</sup> Ibid.,50.

<sup>34</sup> Ibid.,54-55.

brown Jap cannot be equipped with the very quality to be a gentleman. Here in this country “gentleman” is one who knows how to praise (no matter be truth or—), isn’t it? American gentleman is so charming, full of adjective fit for your ladyship, but I am not so gallant. I am only a Jap, you know, ignorant and “narrow minded.”<sup>35</sup>

ここでノグチは、人種の違いも引き合いに出して、彼女への言動について謝罪している。さらに次のように続ける。

もう一度君の作品について言わせてほしい。君は再婚する女性を擁護している。それは分かった。君はとても同情的な考えを持っているんだね。でも僕には別の考えがあるんだ。僕は、どんな女性も男性もそう何度も結婚するべきではないと強く思っている。靴下や下着を替えるみたいに、夫や妻を替えてはいけないと思っているんだ。(中略)だから僕は作品には、そんな人物は登場させたくない。(Once more of your story. You defend of the woman who shall marry again — all right. You have a very good sympathetic opinion. But I have another. I firmly believe that any woman or man can’t allowed to be so indulging in matrimony. I don’t think that people can change husband or wife as if with the socks or underwear .... I will never put such a character in my story.)<sup>36</sup>

ノグチは傷ついたギルモアの心情を慮りながら、自分の信じる結婚観を丁寧に説明する。その際、自身を卑下し、反省する言葉を多く使っている。このような書簡を、日本人の男性作家が日本人の女性作家に送ることは考えられるだろうか。西洋と東洋という文明の上下関係をノグチは感じていたとも考えられるし、また英語を母国語として使う彼女と、英語習得者である日本人の自分という上下関係も感じていたであろう。しかし、それ以上にただ純粋に、ギルモアが持っている文学的知識、素養、文筆力をノグチは認めている。そして対等以上の存在として、ノグチはギルモアに頼っているのである。

またここで、ノグチは西洋の男性と女性との結婚観の違い、価値観の相違にも気づいている。ノグチは結婚とは一度きりで、真剣勝負だということを強調したかったようで、容易に結婚相手を変えろというノグチが西洋的だと理解している結婚観に異論を呈した。もちろん、ギルモアに対して恋愛感情を抱いていたから、ただ一人の男性に生涯を捧げる女性像を過度に期待したのかもしれない。いずれにしても、ここにはノグチが男性として女性に望む、夫に忠実な妻像を垣間見ることができよう。

最後に、ワタンナとの友人関係について述べた書簡も見てみよう。先述したように、後にワタンナのジャポニズム小説を批判していたノグチではあったが、最初は彼女に対して尊敬の思いを抱いていた。1900年の6月19日付け、ノグチから友人のチャールズ・スタッダード宛書簡には、ワタンナと

<sup>35</sup> Ibid.,58.

<sup>36</sup> Ibid.

会ったときの印象が綴ってある。ワタンナはイギリス人の父と中国人の母との間に生まれたが、彼女は母が日本人だと偽って作家活動を行っていた。彼女に対して次のように言及している。

彼女はオノト・ワタンナという名のハーフなんだ。母は日本人で父がイギリス人だそうだよ。彼女はとても利発でこれまで雑誌にとっても賢明な短編を書いているんだ。(中略)彼女は実に聡明だよ、でも健全な精神や素晴らしい哲学は持っていないみたいだ。結局のところ、彼女は女性だからね。(She is a half caste woman with the name Onoto Watanna; her mother was Japanese, father being an English; she herself being very bright writes now and then very clever short stories for magazines .... She is awfully clever, but she has no sound mind and sweet philosophy. She is woman after all!)<sup>37</sup>

まずは、作家としてワタンナを尊敬し、彼女の聡明さを認めている。しかしその一方、ジャポニズム小説を先に出版し人気を博していることへのライバル心からか、また母が日本人であることから由来する完全な西洋人でないことへの人種的偏見からか、パーティントンやギルモアに見せた称讃の態度とは異なり、健全な心、優れた人生観や哲学の欠如を指摘し、女性に対する偏見も垣間見える。もちろんそれは、書簡の受け取り手がスタッダードという男性の友人であることも一因であろう。

パーティントンとギルモアが、朝顔嬢の生き方や結婚観などの描写に、どれぐらい助言や書き換えなどをしたのか、それらを説明するための資料が現時点では見つかっていないため、立証することは困難であるが、これらの書簡の記述からもわかるように、『米国日記』を作り上げていく過程で、ノグチはまずアメリカの優秀な女性作家、文筆家たちの存在、その文学的素養に感銘し、ときに圧倒され、また尊敬し、それゆえにかなりの程度依存しながら執筆を続けていった。彼女らとの交流によって、アメリカ女性らしい快活さを身に着け、文学に興味を持ち、結婚のみに人生を捧げるのではない自立した、強い個性の朝顔嬢を生み出していったと考えられる。

### 3-2. 女性読者、女性作家の時代

上述した女性作家たちとノグチの関係は、女性作家たちが活躍するアメリカ社会を反映してもいる。ノグチは『米国日記』を、日本ではまだ見られない、女性作家たちの台頭という文学的土壌において、生み出したのである。アメリカにおいては、19世紀半ば頃から女性読者が増大し、女性小説家が誕生していくという時代を経験する。日本における平塚らいてうらの『青鞥』運動を女性作家の台頭の明確な動きの初めと捉えるならば、平塚らいてうが「原始、女性は太陽であった。」と高らかに女性の復権を主張したのは1911(明治44)年であるため、20年以上も先んじている。アメリカでは19世紀前半まで、人口増加、技術革新、都市化、生活水準の向上、図書館普及などにより、読者層が増大したという。さらに市場経済の発達により、男性・女性の領域が分離され、家庭における女性の役割が増大した。女性たちはその中で、女性に求められる「良妻賢母的」イメージの縛りから感じる抑圧感

<sup>37</sup> Ibid.,44.

のはけ口を、ロマンス小説を読むことに求めた。19世紀後半、中産階級や大衆の出現により読者層が明確化し、職業としての小説家すなわち経済的手段として小説を書く女性たちが生まれ、彼女らの作品が売れるようになるにつれ、作家として自立していくことも可能となった。そして1870年代以降は、作品の芸術性も主張していく<sup>38</sup>。

ノグチが渡米する前までの読書経験や教育から考えると、女性のこうした進歩について話は聞いていたかもしれないが、基本的には文学というものは男性が創るもので、女性作家はまだ稀有な存在という時代にノグチは青少年期を送っていただろう。したがって、先の書簡資料からも窺えたが、進歩的で自立した女性作家たちの活躍に目を見張り、彼女たちの文筆力に感心したと考えられる。現にノグチは、どのような女性に魅了されたかということ、帰国後に回想しており、その中でイギリスの女性や社交界の女性などをのちにエッセイで挙げているのである。例えば「私の最も魅せられた英国の一婦人」を見てみよう<sup>39</sup>。ノグチは、26、7歳の頃、『東海より』(From the Eastern Sea) (1903)を出版するためにイギリスへ渡った。ロンドンにおいて、日本協会の創立者アーサー・デオシー氏を訪問し、詩集出版の希望を語ると、デオシー氏は知人のキャンベル婦人を紹介してくれた。彼女はアイルランド人で本名をコリン・キャンベル (Colin Canbawl [sic]) といい、かつてコンノート殿下の息子と結婚したがのちに離婚し、『ワールド』(World) という社交雑誌の婦人記者として勤めていたという。ノグチは彼女を介して詩集出版に漕ぎつけようと、その意図を話したが、「倫敦の真中に詩人が一人や二人来たつて、<sup>とて</sup>逆も響きやしませんよ」<sup>40</sup>と冷笑しながら断言された。そのとき、その堂々とした、ノグチの言葉を借りれば「ギャラント」な婦人記者の前で、はなはだしい気後れを感じたという。

#### 4. ノグチの女性観への影響

以上のようにノグチの作品は、欧米の女性作家、文筆家たちの台頭という社会的背景の中で成立し、彼女たちの影響をかなり受けて、またそれをうまく活用して成功した作品だった。それでは、この作品を描いたというノグチの経験が、その後の彼の執筆活動に何か影響を与えていないのだろうか。

1904年9月、ノグチはギルモアを残して帰国する。その後1906年に3歳の息子イサムを連れてギルモアが来日し、ノグチと同居した。しかし翌年、女中であった武田まつ子とノグチの間に長女が生まれ、1910年には長男も誕生する。レオニーとイサムは東京大森に引っ越し、完全にノグチとは別居した。作品と作家を直接的に結びつける必要もなければ、作品に描かれていることと作家の実生活を結びつけて考える必要もないであろう。しかし、ノグチ自身は『米国日記』において、女性の幸せは結婚にあるのではないと朝顔嬢に主張させ、男性に依存することのない女性像を描き、さらにそれを求める日本社会の考え方や男性の物の見方を、批判的に説明していたにも関わらず、彼自身は伝統的な男性の慣習や結婚のあり方に則ったままに見える。

<sup>38</sup> 羽田、『ジャポニズム小説の世界』、63-86。

<sup>39</sup> 野口米次郎「私の最も魅せられた英国の一婦人」『婦人画報』193号、1922年、29-30。

<sup>40</sup> 同上、30。

私生活は別問題として、それでもノグチには何か女性作家についての視点に関し、変化はなかったのだろうか。例えばノグチと同様に、約 18 年間の滞米生活を送った一世世代の作家翁久允は、1924 年に帰国後、やはり長年体験してきたアメリカでの男女平等という観念と比較して、日本社会における男尊女卑的文化に逆カルチャーショックを受け、それを批判的に見ていた<sup>41</sup>。さらには女性作家たちとも交流を持ち、『週刊朝日』の編集を担当していた時代には、新進女性作家の特集などを組んで彼女たちの作品を世に出そうと努めた<sup>42</sup>。そうしたフェミニスト的な思想的影響を、ノグチは得なかったのだろうか。帰国後、ノグチは日本の女性作家をどのように捉えていたのだろうか。

ノグチは 1904 (明治 37) 年 5 月、『クリティック』(*The Critic*) に、「現代日本女性作家」(“Modern Japanese Women Writers”)<sup>43</sup> というエッセイを発表している。そこでは、女性作家樋口一葉、中島湘煙 (岸田俊子)、若松賤子、田辺 (三宅) 花圃、歌人北田薄水、小金井喜美子らを英語で紹介している。1911 (明治 44) 年に、『青鞥』運動で女性作家たちの存在が日本で注目される 7 年も前に、日本の女性作家たちをアメリカを主とする読者にアピールしていることは、彼の『米国日記』また続編『小間使い日記』を執筆した背景と無関係とは考えられない。この両著作を作り出す過程で、アメリカにおける女性作家たちの力を肌で感じたノグチは、日本の女性作家についても再認識したのではないだろうか。

では、ノグチが上に挙げた女性作家たちを、どのように紹介しているのかについて見てみよう。まず冒頭において、ノグチは樋口に対する評価を引き合いに、日本の女性作家たちの置かれた立場について言及する。彼は樋口について「果てしなく悲しむべき樋口一葉 (彼女のペンネーム一葉、一枚の葉という孤独な意味が込められている) は、日本の女性たちの犠牲と情熱の解釈者であった。」(“The eternally lamentable Ichiyo Higuchi (Ichiyo being her pen name with the solitary meaning of ‘single leaf’) was an interpreter of Japanese women’s sacrifice and passion.”)<sup>44</sup> と明言する。そしてそれに続いて、日本の女性は、平安時代にはその文学的豊穡性を謳歌したが、今日の日本における女性に対する見解はすっかり変わってしまったと言う。すなわち中国文学の影響、とりわけ儒教の影響により、女性たちは男性に対する絶対的な服従者と化し、奴隷となってしまったと強い言葉で現状を説明するのである。そして平安時代以後、しばらくはその服従者としての女性の代弁者たる女性作家はいなかったが、40 年前、西欧文明が、突如侵攻し、特にアメリカが日本の閉ざされた風潮を純化させたときに、我々の女性に対する偏見は崩壊させられ始めたと言っている。しかしまだ女性たちは、環境と苦しみの中の生産物であるとノグチは言う。そしてその最たる例として、樋口の「十三夜」を例に挙げるのである。ノグチはこの物語のあらすじを紹介する中で、主人公お関が家制度のもとで耐え忍ぶ姿を強調している。

また中島湘煙については、彼女の漢詩における才能とともに、政治的な活動、女性の地位向上のた

<sup>41</sup> 水野真理子「翁久允の思想 (15)」『綺羅』42 号、2017 年 12 月、45-47。

<sup>42</sup> 水野真理子「小寺菊子と翁久允—文学を通じた交流」『とやま文学』36 号、2018 年 3 月、153-59。

<sup>43</sup> Yone Noguchi, “Modern Japanese Women Writers,” *The Critic New Series: A Weekly Review of Literature, Art and Life* (May 1904) : 429-432.

<sup>44</sup> *Ibid.*, 429.

めの活動に焦点を当てて紹介している。若松賤子については、彼女の『小公子』他翻訳における業績を賞賛し、さらに彼女が教育者としても、夫を真に支える妻としても優れた存在で、アメリカ的知識と日本の洗練さの両方を備えた稀有な人物だとして説明している。加えて、田辺花圃に関しては、社会、政治評論家でもある著名な三宅雪嶺の妻であり、その短編小説や旅行記には女性らしい甘美さと鋭い観察眼が表れていると評価する。また北田（梶田）薄水については、小姑からの仕打ちに堪えかねて自殺する女性を扱った短篇「鬼千疋」を紹介している。そして、大塚婦人や小金井喜美子ら、まだ著名となっていないが百人ほどの女性詩人がいるのだと言及して、このエッセイを締めくくっている。

最初に挙げた樋口の例から考えると、ノグチは日本の女性作家の、特に男性との関係における犠牲的な苦悩を、まずはアメリカの読者に向けて強調しているのがわかる。この部分は、ノグチのフェミニスト的側面とも考えられる。しかしその一方で、若松の説明の仕方に見られるように、男性を支える女性の役割を日本的な洗練さと認識している面もあり、ノグチの中にある伝統的ジェンダー観、日本女性の理想的姿、女性に対する期待が垣間見えている。こうした両義的な主張を包含しながらも、1904年というかなり早い時期に、女性作家をアメリカ読者に紹介したという点は、ノグチの女性作家への開眼とも捉えられ評価すべき点でもあろう。

また他にも帰国後、女性についての随筆や評論を、日本の雑誌にも多数発表している。先述した「私の最も魅せられた英国の一人婦人」の他、日本の女性の魅力について考察する『先駆者の言葉』（1914）所収の「罹災女礼讃」<sup>45</sup>、アメリカ、日本両方における印象的な女性について書いた「垣間見た女の印象」（1924）<sup>46</sup>などのエッセイを執筆している。また発表媒体も『女学世界』『婦人公論』など女性向け雑誌にも寄稿している<sup>47</sup>。次第に日本においても女性作家の存在が目立ってきたという点もあると思われ、それを反映しているとも考えられるが、アメリカ時代に進歩的な女性たちと実際に交流し、様々な意見を交わし、作品にも伝統的な日本女性像とは異なる、快活でアメリカ的な女性主人公を描いたことが、帰国後、女性作家や女性観を扱ったエッセイを執筆することにつながったと考えられる。

その一方、ノグチは男性よりも女性の力の方が勝るというアメリカを、過度に批判する視点も提示している。女性に対する尊敬は影をひそめ、むしろ男尊女卑的観念にノグチがいまだ縛られているような主張も見受けられる。「米国人の解剖」（1917）<sup>48</sup>で彼は次のように説明する。

男子は二六時中外に居て金銭のため働くのを普通の生活とする米国は、今日にいたるも『女崇拜』から脱することが出来ぬ。この女崇拜を多少は有意味な実行として最初の歴史の頁の上で見ることが出来るけれども、今日では空証文一枚に苦しめられて頭が上がりぬと同様に馬鹿の骨頂である。（中略）又それ（力のある露西亜文学のこと—筆者）を読むものが皆な女（米

<sup>45</sup> 野口米次郎『先駆者の言葉』（改造社、1914）、142-153。

<sup>46</sup> 野口米次郎「垣間見た女の印象」『婦人公論』9巻2号、1924年、42-44。

<sup>47</sup> 渥美育子「ヨネ・ノグチ文献（一）」『比較文学』12巻、1969年、68-92。

<sup>48</sup> 野口米次郎「米国人の解剖」『中央公論』32巻10号、1917年、108-115。

国の男位読書を嫌ひ或は読書の時間を持たぬのは稀れだ) であつて見れば、女自身が無反省で非現実な理想論を切捨て、『女崇拜』を進んで辞退しない以上は、男子は永久にその不思議な耶教から救はれまい(後略)。

已に米国の文明は女性的である。如何にも弱い文明である。(中略) 女性的文明はいつも感情的である。米国の文明はしかく感情的である、何処迄も非現実である、非科学的である。<sup>49</sup>

全体の文脈の中でこの箇所を捉える必要があり、経済活動ばかりに専念するアメリカの男性を批判するための論理ともいえるが、『米国日記』の執筆時に、女性作家たちの文筆力にかなり頼っていたノグチが、ここまで女性中心的文明を批判するというのは、やはり彼の心の奥底に、頑として変え難い男尊女卑的思考が根づいているからであろうか。もしくは、アメリカに憧れ西洋文化を理解しようと試みたその反動として、日本的な価値観にその振り子が揺れてしまったということであろうか。「二重国籍」詩人として、日米の狭間にある詩人としての所在のなさを告白したノグチであったが、男性、女性観においてもこの両文化の間で揺れていたのであろうか。

## 5. おわりに

以上のように、ノグチの『米国日記』執筆時期に着目して、明治期の女性観、朝顔嬢のイメージ、そしてノグチを支えた女性作家たちへの認識を探りながら、ノグチが女性作家たちから受けた影響について、帰国後の執筆活動も含めて考察した。朝顔嬢は明治期の典型的日本女性像とは異なる、快活で自立し、文学に興味のある女性として描かれ、その像は、ノグチが交流を持った女性作家たちのイメージや、当時のアメリカにおける女性作家の台頭という時代を反映していた。帰国後のノグチは、その女性作家たちとの交流経験を生かし、一方では日本の女性作家の存在やその才能を再認識し、彼女らについてや、また米国の女性とは異なる犠牲的な日本女性の姿を、欧米の読者に伝えようとした。しかし他方では依然として変わらない男尊女卑的女性観を拭き切れず、米国における女性尊重の状況を批判的にも捉えていた。ノグチは、自身を日本人としても米国人としても認められない、括弧付きの「二重国籍者」たる詩人だと、その苦悩を表したが、女性観についても彼は両義的な主張を行った。そこには彼のアメリカにおける滞在経験からもたらされた、両文化に接したが故のゆらぎや迷いが見受けられる。ノグチの女性観のあり方については、今後さらに、日本と米国の文明をノグチがどのように捉えたのかという問題も含めて、検討する必要があるが、そうした彼の思想の形成に大きく関わったのは誰だったかと問えば、ギルモアをはじめとするアメリカの女性作家たちであったと明言できよう。

---

<sup>49</sup> 同上、111-112。

水野真理子  
富山大学教養教育院

本研究は、JSPS 科研費 JP16K02485 の助成を受けたものです。